

---

# 魔法少女リリカルなのは とある転生物語

T E

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは とある転生物語

### 【Nコード】

N0131BA

### 【作者名】

TE

### 【あらすじ】

これはとある転生した青年の物語。原作にどのように影響するか。  
.....

プロローグ『えっ？転生？』by???

ここは           どこだ？

俺はどうしてここに居る？

あたり一面は白い空間で何も無い

ん？

そもそも、『俺』は誰なんだ？

「あなたは『中村潤一』という人間です」

ああ           。確かにそんな名前だった気がする

それで、俺の名前を知っている羽の付いたあなたは誰なんだ？

「羽がある時点で誰かわかりませんか？」

うーん           。ハーピー？

「なんでそこでモンスターの名前が           」

冗談だよ。天使か神様か           いや、女神様なのかな

「ええ。私は裁判の女神『サリエル』ともうします」

それでそのサリエル様が俺に何かよう？つか、女神様ってことはこ

こは天国か？

「いいえ。ここは下界と天国の狭間です。あなたはここにいる理由  
はわかります？」

そりゃあ死んだからだろ？

「では、その理由は？」

それは　　えーっと、思い出せない。それに思い出そうとする  
と頭が痛くなる

「それはあなたの心が拒絶しているからです。ですからあなたはさ  
つき自分の名前を思い出せなかった。自分の体が具現化されていな  
いと同じように　　」

俺の心が拒絶している？それに具現化つて　　？

あつ、俺の体がない

「あなたの今の状態は白い塊。魂だけの状態です。目を閉じて、リ  
ラックスして、自分の体を思い出してください」

リラックス　　自分の体を

あつ、なんだが暖かさを感じる

「それがあなたの体です。どうですか？死んだ理由を思い出せまし  
たか？」

いや、そこだけが思い出せない。もやもやと霞がかったような

「そうですか　　でしたら」

　　どうして急に抱きしめる？

「今からあなたが死んだ光景をあなたに見せます。わかってもどうか気を確かに保って下さい」

ぐっ、いきなり何かの光景が頭に！？

「落ち着いて。気を確かに」

「どうですか？思い出せましたか？」

俺は　　身投げしたのか

「はい。あなたは仕事や人間関係のストレスから耐えきれずに

」

　　なんで思い出させたんだ

「必要なのです」

何にだよ！？

人の嫌な記憶を思い出させて　　一体なにに必要なんだよ！

「あなたがこれから『転生』をするために必要なのです」

『転生』！？  
なんで？

「あなたがまた生まれて生きるために必要だからです」  
どういうことだ？

「生き物は生死を繰り返します。また生まれたとき、前世と同じ過  
ちを繰り返さないように天国で学ぶのです」

だったら俺もそうすればいいじゃねえか

「ええ。でも、あなたはこれで100回目の身投げ  
しているのです」  
自殺を

はい？

「あなたの前世、そのまた前世、さらにその前世。計100人の前  
世のあなたが自殺しているのです」

ま、まじで？

「はい。あなたはこれまで天国で何を学んでいたのだろうかと呆れ  
てしまうくらいに異常です。ですから特例としてあなたは『転生』  
という形で学んでもらおうと思います」

学ぶって一体なにを？

「生きることの素晴らしさと人と人の絆をです」

は、はあ

「さっそくですが、転生する場所は『魔法少女リリカルなのは』の世界です」

えっ！まさかのアニメ世界に転生！？

「はい。そういうのを学ぶにはアニメが一番かと思ひまして。あなたはこの作品を知っていますか？」

まあ、大まかな話ぐらいしか

「それでは転生しようと思ひますが、何か希望はありますか？できる限りの希望は叶えましょう」

んじゃ、原作キャラに絶対に会わないようにしてくれ

「それでは転生する意味がないのでダメです」

ちっ 。 なら、原作の記憶を全部消してくれ

「理由は？」

深い理由はないけど、原作を知ってたんじゃ本当の生きることの素晴らしさや絆つてもんがわからねえと思うんだ

俺もいちいち同じことを繰り返すのは嫌だし、前世の記憶がなくてもね

「わかりました。その希望は叶えましょう。他にありますか？」



「頑張ってくださいね!」

こうして、訳も分からず青年の転生物語が始まる  
青年はそこで目的のものを得ることができるのか

## 第一話 『女神に前世の記憶も消しといてと頼んでおくべきだった』 by 潤一

こんにちは。俺の名前は『上條潤一』。前回、転生することになってしまった悲しい男さ

なんか知らんが名字だけ変わって名前は同じなのは女神の計らいなのだろうか

まあ、どうでもいいか

ちなみに年齢は五才。幼稚園児だ

それなりに生きてきたが前世となんら変わらない

両親は共働きで家にいないし、一人っ子だし、友達もいない

まあ、ぶっちゃけ友達など作る気になれない。理由は俺が前世の記憶を持ってしまっているからだ

俺の前世の年齢は24歳。いい大人だ

そんな大人が、しかも無愛想で無口で口下手で有名だった俺が幼稚園児と仲良くなれる訳もなく、ずっと一人だった

両親はそんな俺にあまり関与してこなかった。仕事が生きがいのない人たちだ。大人しい子供だと思ってるんだろう

前世の記憶がなければまた何か違うんだろうか

まあ、今更気にしても仕方ないんだが、そんな俺もひとつの趣味がある

それは今、この手に持っているサッカーボールがそうだ

俺は前世では唯一サッカーが大好きで暇さえあればサッカー観戦をしていた

もちろん、やってもいたが才能がなく、努力もしていなかったからるくに上達もせず、高校で引退した

せめて今回はと思い、始めたのだ。このボールも両親に初めてお願いして買ってもらった

そのボールで練習しようと思つた近くの公園に来たのだが

「  
」

一人、ブランコに乗って俯いている女の子がいた。年齢は俺と同じくらいだな

なんかたびたび見えるその顔は悲しそうな表情だ

「まあ、いいか  
」

正直どうでもいいし、話しかけたところで俺が慰めることなどできる訳がない

だったら、練習していた方がいいに決まっている

「よっ、ほっ！  
」

ぐっ、やっぱりリフティングは難しいな。でもまあ、前世では10回できるかできないかくらいだったのが、今では60回近くできるようになっているのだから練習はやっぱり必要だよな、うん

「おっと」

リフティングを失敗してしまった。こんなことなら女神にサッカーの才能をくれとか言っておくべきだったか

「  
」

「  
」

ボールを追いかけるとその先にはブランコに乗っている女の子の目の前にあった

「  
」

「  
」

俺は無言のままボールを拾うと元の位置へと戻る

そりゃあ、取ってくれって話すこともできたが、面倒だから止めた

そのまま一時間くらい練習して、俺は家に帰った。あの女の子はその少し前くらいには居なかった。家に帰ったのだろうか  
まあ、どうでもいいか

一週間が経ち同じ時間。俺はまた公園で練習していた  
これが俺の日課みたいなものだから良いとしてまたあの女の子がいた  
最初は気にしていなかったが一週間も一人ブランコでいれば、誰で  
も気になるだろう

しかも、見られているような気がするし 。 気のせいかな  
話しかけてみるか？いやでもな

「あつ」  
「あつ」  
しまった。考えごとをしていたせいでリフティングを失敗してしま  
った

「はい」  
「えっ？」

ボールを取りに行こうとしたらブランコに乗っていた女の子。略し  
てブラ子が俺のボールを持って俺に渡してくる

「」  
「あつ、ちよつ」

ボールを渡すなりブラ子はさっさと、逃げるように公園から居なく  
なってしまった。せめてお礼の一言でもと思ったのだが

まあ、いいか

今日の練習でリフティングが60から80までできるようになった  
えっ？全然変わってねえだっけ？  
うるせえいやい

第二話『なんつーか、仲良くなるのはほんの些細なきっかけなんだな』by潤

前回の練習からまたさらに一週間

また、俺はリフティングの練習をしていた

えっ？どうしていつもリフティングの練習なのかって？友達が居ないからだ

言ってる悲しくなるからその話は置いといて今日は、ブラ子に来ていない

いつもはしばらくしたらブランコに乗りにくるんだが

まあ、いいか

俺には関係ない

「おっと

」

どうも考えながらのリフティングができないみたいだ

「

」

「あっ

」

俺の目の前にはブランコに乗った女の子。略してブラ子がい  
そのブラ子の手には俺のボールを持っていた

「はい、びっぞ

」

「あ、うん

」

俺はブラ子からボールを受け取る。受け取ったのを確認するとブラ子はいつもの定位置ポジションへと移動した

「  
」

うん。わかってる。俺は今言わなければならぬ言葉がある  
それはたった一言。誰でも知っている言葉だ

「はあ  
」

俺は深いため息を吐いた後、練習を再開した。俺って本当に情けないヤツだ

「まあ、いいか  
」

俺はリフティングしながらそう呟くのだった

あれから数日が経って俺はいつも通り練習のため公園に来たのだが俺は入口で止まっている

「うっ  
ぐすっ  
」

ブラ子が泣いていた。何で泣いてんだらうか？  
どうする、今日は帰るか？

いやいや、別にブラ子が泣いていようがいまいが俺にはまったく関係ない事じゃないか

そう！関係ない！

だから俺は練習する！

「  
「

「っ  
「！

俺が公園に来たのに気づいたのか涙を両手で必死に拭っている。どうやら俺には泣いているところを見られたくないようだ

「  
「

「  
「

いつも通り、俺は練習、ブラ子は見学。そう。それはいつも通りなのだが、あんなブラ子の様子を見て集中できる訳もなかった

「はあ たくっ  
「

俺は不自然にならないようにボールをブラ子の方へと蹴った

「！  
「

ブラ子がボールを拾うと嬉しそうな表情でこちらに向かってくる。  
まるで犬みたいだ

「はい。どうぞ」

俺が無言で受け取ると、またブランコへと逆戻り

もう一回やってみたら嬉しそうにボールを拾いこちらに向かってくる。あいつは犬か？

ボールをまたブラ子に向かって蹴る。ブラ子が持ってくる

また蹴る。ブラ子が持ってくる

「  
「  
「  
蹴れば持つてくる。蹴れば持つてくる。その繰り返し

ちよつと楽しくなっている俺がいる。って、遊んでどうすんだよ、俺

「

「

「？」

ボールを受けとらない俺を見て首を傾げるブラ子。可愛いなちくし  
ようめ

とりあえず、ボールを受け取ると地面に落としましたブラ子に向かっ  
て蹴る

「

「

ブラ子は俺に持つてくるためにボールを拾おうとするがそれは問屋  
が卸さない

「ちよつと待てい!!」

「!?!」

ビクッと反応するブラ子は泣きそうな顔してしまっている

「知っているか？サッカーではGK以外が手を使ったら『ハンドリング』という反則になるんだぞ」

「ふえっ？」

「つまり渡す（パスする）ときは足でやれ」

「」

ブラ子は恐る恐るボールを地面に置く。そしてゆっくりと足を振りかぶりボールを蹴った

「うしっ！ほら」

「ふえっ？」

俺はボールをブラ子に渡す。そんな行動に驚いた表情をするブラ子  
まあ、こんな事するのは初めてだから仕方なくはあるんだが

「ほらパスだパス」

「う、うん！」

「ナイスパス」

「あ、ありがとう」

俺とブラ子は、日が落ちるまでパス交換を続けた

「もう時間だな」

「うん」

「おいおい。何でそんな顔すんだよ。また明日もあるんだからさ」

「えっ？」

「んだよ？文句あるか？」

「な、ないよ！でも 迷惑じゃない？」

「全然。むしろ今日みたいにパスしてくれたら助かる」

「」

ちよつと恥ずかしいのか下を向いてしまうブラ子。まあ、嘘は言っていないし

「それじゃあ、また明日な」

「う、うん！！また、明日！！」

ブラ子は元気良く挨拶してから帰っていった。まあ、最初より元気になったみたいで結果オーライだな

明日もブラ子が手伝ってくれるし一石二鳥 　ん？

「そういえばあの子の名前なんて言ったっけ？」

名前をすっかり聞き忘れてた

「まあ、いいか」

第三話『そういえば、あの子の名前知らないなの』『b yなのは

さて、なんかいつの間にか一緒に練習（というより遊び？）をすることとなった俺とブラ子

今日も公園でサッカーの練習をしている

「ねえねえ」

「ん？」

「なんであなたはここでサッカーの練習をしているの？」

最近ではブラ子がよく喋るようになった。まあ、嫌ではないだ。むしろ、最初より明るくなってほっとしている

「特に理由はない」

「そうなんだ。それじゃあ、どうして一人で練習していたの？」

「友達がいないからだ」

「なんかさらっと重い言葉を言った気がするなの」

「気にするな。つか、俺からも質問があるんだが」

「なんでこの前泣いてたんだ？」

「」

おおつと、やっぱり聞いてはいけないことだったみたいだ。ブラ子  
が俯いてしまった

「あー 言いたくねえんなら別に」

「うっん 言うよ 実は」

ブラ子の話によるとブラ子のお父さんが大怪我して入院してしまい、  
そのせいで両親が経営している『喫茶翠屋』が大忙し

だから、お母さんは一人で営業。お兄さんは何故か道場に剣術の修  
行。お姉さんはお店のお手伝い

家に帰っても誰もいない。ブラ子も手伝おうとはしたのだが、危な  
いからと追い出される。みんなが帰ってきてても疲れ果ててすぐに眠  
ってしまつらしい

そんな疲れ果てている家族を見て『自分の我が儘でみんなをさらに  
疲れさせる訳にはいかない』と結論。だから、一人公園で遊んでい  
たらしい

「ふーん お前の家も大変なんだな」

「うん でも、私が我慢すればみんなが助かるから」

「自分が泣くことになってもか？」

「うん」

なんともまあ家族想いなブラ子なんだ

「でもまあ、今日ここでぐらいならそのストレスを発散しても良い

んじゃねえか？」

「えっ？」

「ほら。そのボールを思いっきり蹴っ飛ばせ。そうすれば少しはスツキリすんだろ」

俺はブラ子にボールを渡す。ブラ子は少し戸惑いを見せたが、両手を握りしめ覚悟を決める

「え、ええええいつ！！」

「おおっ！！」

ブラ子が蹴ったボールは勢いよく飛んでいく。相当たまっていたんだろう。ボールは軽く俺の頭上を越え後ろにある木へと一直線

「って、えっ？」

「あああっ！？」

がささつと、木の茂みへと入ってしまう。いやまあ、俺の頭上を越えていた時点でそうなるとは思っていたけどさ

「

「

しばらくしてもボールが落ちてこない。どうやら木の枝に引っかかっちゃったようだ

「うーんと

あっちゃあ

」

ありゃあ、木を蹴ったぐらいじゃ落ちてきそうになさそうだ

「あ、う

」

「ん？」

げっ、振り向くと今にも泣きそうなブラ子

「あー、落ち着け。大丈夫だから」

「でも

でも

」

「明日、なんとかする。だから今日は帰るとしよう」

幸いそんな高い所に引っかかっている訳でもないし、確か家に梯子があるからそれを使ってボールを取ろう

「ごめんなさい！」

「いや別に謝らなくていいだろ。そもそもは蹴ろって言った俺が悪いし」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

「あっ、おい！」

今にも泣きそうなブラ子はすごい勢いで走り去ってしまった



度知っているサッカーだった。しかも、やっていることはいつもリフティングだった

前にお父さんに連れて行ってもらった少年団のサッカーチームの練習を見に行ったことがあったんだけど、そこにいた男の子たちよりも上手ではなく下手だった

でも、毎日練習をしていたおかげで少しずつだったけど上達していた。私はそんな男の子を見ていて楽しかった。そして、そんな男の子を見るのが私の日常となっていた

それから男の子が失敗したボールを拾って持ってくるのも私の密かな楽しみになっていた。でもそんなとき

『ちょっと待てい!!』

『!?!?』

いつも通りボールを拾い持ってこようとしたら、いきなり男の子が大声で呼び止める。どうしよう 私、何か怒らせちゃったのかな

『知っているか？サッカーではGK以外が手を使ったら「ハンドリング」という反則になるんだぞ』

『ふえっ?』

『つまり渡す（パス）するときは足でやれ』

』

』

私は男の子の言われた通り足でボールを渡した

『うしっ！ほら』

『ふえっ？』

今度は男の子が私にボールを渡しました。どういふことかわからず  
変な声を出してしまう

『ほらパスだパス』

『う、うん！』

『ナイスパス』

『あ、ありがとう』

私と男の子は日が暮れるまでパス交換をした。そのとき私はここ最  
近で一番楽しい時を過ごしたと思う

『もう時間だな』

『うん』

楽しい時間はすぐに過ぎ去るもの。残念だけど、男の子の気まぐれ  
のおかげで楽しい時を過ごせて感謝するべきだと思う

『おいおい。何でそんな顔すんだよ。また明日もあるんだからさ』

『えっ ？』

『んだよ？文句あるか？』

『な、ないよ！でも 迷惑じゃない？』

『全然。むしろ今日みたいにパスしてくれたら助かる』

『 』

私はこのとき、とても嬉しかった。こんな私と遊んでくれる。必要としてくれている。それだけで私は嬉しかった

『それじゃあ、また明日な』

『う、うん！！また、明日！！』

私はこれまで明日が楽しみになったのはこれが初めてだった。そして、私と男の子との関係が始まった

それなのに

（あの男の子の大切なボールを木の枝に引っ掛けちゃうなんて

）

なんで大切なボールであるかわかるのだった？

それは、あのボールが唯一親から買ってもらったものだと言き、そのボールはかなりボロボロで毎日使い大切にしていたのがよく感じとれたからだ

「このままじゃ私

またひとりぼっち

」

それだけは嫌だ！でもどうすれば

なんか帰る途中で靴ひもが切れて転んだ俺。こういうときって結構な確立で面倒なことが起きるんだよな

だから俺は家ではなく、公園に向かっていた。理由はなんとなく、つて訳ではなくこれは家に帰ったら最悪なことが起きるぞと女神のお告げなのだろう

だから、とりあえず公園で時間を潰そうと考えたのだ

「だったらついでにボールを取ろうかな」

正直、この体であの木に登るのは大変だが、まあ、なんとかなるだろ。あつ、そういえば俺、高所恐怖症だった

「まあ、なんとかかなんだろ。ブラ子でもああして頑張っているんだし

」

えっ？

「あいつ何やってんだよ!？」

俺よりも背が小さいのに木に登ってもし落ちたら怪我しちまうだろが！  
それにふらふらで今にも落ちそうじゃねえか

「ちっ  
」

柄にもなく焦っている俺は走ってブラ子の元へと向かった

「うんしょー！うんしょー！うーんしょー！」

私は今、木を登っている。なぜならボールを取るため

あの男の子に許してもらうためには、あのボールを自分で取って渡せば許してもらえる

そう考えた私は一生懸命木に登ることを挑戦。でもそう簡単にはいかず、何度も何度も失敗したけどもうすぐ枝がある所までたどり着く

「うっ  
」

つい下を向いてしまう。実際に見てしまうと、とても高い。でも、あの男の子に許してもらいたい。だから頑張るなの！

「あと

もう少し

」

枝にもう少して手が届く。私は希望を胸にその枝に手を伸ばしたんだけど

「あつ

！?」

パキツと手を伸ばした逆側の手で掴んでいた木の皮が剥がれてしまう。もちろん私はその重力に逆らうことなどできる訳もなく、そのまま地面へと真つ逆さま

「っ!?!」

やっぱり私はひとりぼっちなんだ。頑張っても報われないんだ

そう思っていたそのときだった

「コノヤロウ!?!」

不意に声が聞こえ、向いてみると私の視線の先には、今まで見たことのない表情で走る男の子だった

「あつ

!？」

「!？」

案の定というか手を滑らしたブラ子が入から落下。小学生とかならともかく、幼稚園児、しかも女の子があそこから頭から落ちたら大変なことになりやがる

「コノヤロウ!!」

俺はいつの間にか走り出していた。俺ってこんな熱血キャラだったか？

まあ、どうでもいい。俺の目の前で怪我なんてされたら目覚めが悪い

「ぐっ

」

やばい、間に合わない。このままじゃブラ子が

つか、何で俺こんなに必死になっただ？

そもそも、あいつがああなってるのは自業自得だろ？大丈夫って言ったのにボールを取ろうとしてさ  
バカじゃね？ほっとけばよくね？



「間に 合った」

「ふえっ!?!」

俺の腕の中には目を見開き驚きの声をあげるブラ子

「おい、怪我はないか?」

「う、うん イタッ」

って、おいおい。よく見たら手のひらが擦り傷だらけじゃねえか

「たく、無茶しやがって」

「ひゃっ!?あ、あの　　!?!」

俺はとりあえずブラ子を抱き上げ、ベンチに座らせるとポケットに入れていたティッシュを水道の水で湿らせる

「ちょっと痛い但我慢しろよ」

「あうっ　　」

湿らせたティッシュで手を綺麗にし、そのあとはハンカチでばい菌が入らないように巻きつける

「これは応急処置だから帰ったらちゃんと消毒しないとな」

「う、うん　　」

「　　」

「　　」

なんともまあ重苦しい空気が流れていやがる

「あの　　」

「あのよ　　」

「　　」  
「　　」

しまった。なんともまあお決まりなことをやらかしてんだよ

「お先にどうぞ」

「あ、うん                      その、助けられてありがとう                      あと、

ごめんなさい！！」

「何で謝るんだよ」

「だってあなたの話を聞かずに勝手な                      」

「ああ。そのこと？気にすんな」

「気にすんなって                      」

「ブラ子が良いかれと思ってやってくれたんだろ？むしろ、俺が謝罪を言うべきなんだろな。『俺のボールを取るためにあんな危険なことをさせてごめんなさい』ってな」

「そ、そんな！これは、自分のためでもあって                      って『ブラ子』！？」

おっと、つい密かに呼んでいた愛称を言ってしまった

「それで、『自分のためでも』とはどういうことかな？」

「それは                      」

ブラ子の話によると、ブラ子は俺が自分のことを嫌いになって遊んでくれなくなること、一人になることが怖かった  
だから、俺の機嫌を直そうと自分でボールを取ろうとした

「だからといって、もっと方法はあったらろうに」

「それは、無我夢中で」

「そうか。まあ、ボールは家から梯子を持ってきてそれで取る。そ  
うちの方が安全だ」

「そっか　それじゃあ、私は邪魔だね。明日は公園には」

「おい待て。なに勝手なことをほざいてやがる。お前も手伝うんだ  
よ」

「ふえっ？」

「お前、俺が一人で梯子を運んだり、木に立てかけたりできる訳ね  
えじゃねえか。それに登っているとき誰かに支えてもらわなきゃ危  
ないじゃんかよ」

「私も一緒に居ていいの？」

「んだよ？嫌なのか？」

「そうじゃないけど　怒ってないの？」

「誰がそんなこと言ったんだよ。むしろ、手伝わないことに怒るぞ」

「でも、でも」

「でももかかしもねえよ。お前は少しその深く考えすぎる性格をどうにかしろ」

「そんなこと言われても                    あっ!?!」

いきなり大声を出すブラ子。一体どうしたんだ？

「あなたも怪我をしているなの!?!」

「あっ、本当だ」

どうやらブラ子を受け止めた時に擦りむいたようだ。    両肘両膝

「なんでそんなに軽いの!? 痛くないの!?!」

「まあ、細かいことは気にすんな。つか、お前に一つ聞きたいことがあるんだ」

「細かくないと思うけど、なに?」

「お前の名前はなんて言うんだ?」

「こうして俺はブラ子こと『高町なのは』の名前を初めて知った

まあ、今まで名前を聞いてこなかった方がおかしいと思うのだが

まあ、細かいことは気にすんな

第三話『そういえば、あの子の名前知らないなの』b yなのは(後書き)

書いといてなんです、擦り傷の治療って消毒はだめらしい

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0131ba/>

---

魔法少女リリカルなのは とある転生物語

2012年1月4日03時46分発行